

## 詩：詩篇

著者	後藤，理郎
雑誌名	龍南
巻	2 0 7
ページ	1 0 8 - 1 1 3
発行年	1928-11-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/9021">http://hdl.handle.net/2298/9021</a>

## 詩

後 藤 理 郎

私は此れが文藝的な意味に在いて一個の詩であるかどうかは知らない、だがもしか之れが一つの力であるなら、まして一つの生命であるならそれで私は満足である。

### 一、(無氣力)

何時に變らぬこの景色が

でもそれは新しい生活なのか

私は不思議でたまらない

七色と音響の流れさる瞬間が

だが人の聲がする

光がどんよりと雲を照して

あゝその音と光は何か

私は熱に浮かされてるんだ

雨風にをかされたしつくい

瓦の上に無ぞうさところがる  
それがとけ去るのを待つてゐる様

誰れがこれ以上の事を知りうるのか

### 二、流れ

日が暮れる

四方の谷から

ゆるやかに

重たげに

闇の手がはひ上る

やがて

空一杯に

廣がつて行く

私は獨りで立つて居る

暗黒の重みは

ひしひしと

大地にせまる

私の前には流れがあり

私の頭上には月が光る

あたりの闇を

つらぬいて

月光は飛ぶ

銀箭の様に

流れは月を浮べて動く、

嵐が来た

すべての沈黙

一切が切つて落された

空気はきしる

流れは異様にさわぎ出す

だが私は動かない

月光は

熱風にあふり立てられる

そして真赤に燃えて来る

水にうつた月かげも

異様にくだけて飛びちがふ

あゝ嵐は益々加はるのだ

凡てが動き出した

躍動だ

戦だ

俺は倒されさうだ

流れよ

お前はやつぱり流れてるのか

その怒號は

その聲は

今の俺にはふさはしい

もつと大きく歌ふがよい

『流れ行くは

唯水のみか

生命も亦

動かんとするもの

そは苦みなり』

その聲は

流れよ

歌か

涙か

それとも

血潮なのか

いやいや

黄金の波だらう

お前の面は

月に輝かれてたんだ

黄金の波

その波も亦

千々にくだけて争つてる

流れ行くものよ

お前は信仰を求めるのか

灼熱燃ゆる月光

その下で

何の抵抗もなく

お前は獨りか

夜は暗いよ

流れよ

しばし見るがよい

あの暗黒な

神秘的な

つかめない

實體を

あいつの姿を

山と呼ぶ

流るる肉よ

お前の心は

あの姿を寫したらう

それとも

寫さうと試みたのか

だけど

お前のその山は

流れにさからつたにちがいない。

愛する水よ

お前の面は

風に荒れ

お前の心は

亦小石にあれてゐる

その苦痛の聲は

私に

いたいたしく

ひびいて来る

私は

お前を愛してる

だが私自身さへ

今にも倒れさうなのだ

私の友よ

お前は流れて行くのだな、

其の前に

一言聞いてくれ

お前が

静かな美しい

星のみを

寫さうとしたときは

おゝその同じ水の面は

もう一つのもを

きつと寫すにちがない

風にうたれる

ひとり木が

それがもう一つのものなのだ

河原に立つた

一本の木だ、

その幹は

風のため

弓の様に

ねじまげられ

その葉は

無慘にも

一枚一枚はぎとられる

だが風は打つ

すべてを打つ

悲痛の聲さへも

お前は

どんどん

流れて行く

私はお前に

聞いて見たい

お前はなぜ

そんなに急いで

行くんだらう

お前は何處に

そんなに早く

急ぐんだらう

『吾は知らず

知らずして流る

されど聲あり

その聲こそ

吾の行くべきもの

その聲こそ

暗黒を通じて

不斷にひびけり』

私は流れに入つて行つた

その聲を聞かんが爲

だが私の兩の耳は

空氣と風

風と水

水と大地

それらのきしめく

怒號で一杯だ

もうお前は

遠くの方に

流れてしまつた。

おゝ行くがよい

一言の同情も

一言のなぐさめも、

そんなものは

何も持たないで

だがどんどん

流れるんだ

流れるんだ

その聲ばかり

それで満足なんだらう

いや満足するがよい